

「赤との混色 紹介文」

岡和田晃

〔ポップカルチャー論〕学生優秀作〕

〔SF Prologue Wave〕は日本SF作家クラブの総会で公認され、有志によって運営されるネットマガジンです。その関係から、寄稿者は基本的に、SF作家クラブ会員なし、その推薦を受けた、現在プロとして活躍中の作家ということになります。

いずれも興味深い作品が展開されていますが、他方で、よりみずみずしい原石のような才能の煌めきに触れてみたい、という方もいらつしやるでしょう。

そこで今回は、十代後半から二十代前半、現役の大学生が書いた作品をご紹介します。経緯は以下の通り……。

私（岡和田）は、二〇一五年から大学で非常勤講師をつとめているのですが、二〇一六年より、勤務先の群馬県の共愛学園前橋国際大学で「ポップカルチャー論」を受け持つことになりました。

SF・ファンタジー文学の古典を講読しつつ、映像資料を交え、ロールプレイングゲ

2
ームの方法論を応用したワークショップを展開するなど、さまざまな角度から、単に消費者としての姿勢から一步踏み出し、ポップカルチャーを学術的かつ批評的に分析する教養を身に着けることを主眼としてきました。二〇一六年の受講生は六十数名。

期末レポートの課題では、創作と評論、双方をOKとしたのですが、創作として提出されたものうち、優秀作を皆さんにご紹介したいと思います。今回お披露目する、葉月雨音さん（ペンネーム）の小説「赤との混色」は、二〇一六年の講義から生まれた優秀作。一風変わったホラー作品です。

「ポップカルチャー論」では、モダン・ホラーについても時間を割き、J・S・シェリダン・レフアニュ『カーミラ』、H・P・ラヴクラフト『ダゴン』、藤子・F・不二雄『流血鬼』といった古典的な作品を読み、また吸血鬼文学の歴史についても講義しました。

それとともに、ゴシックパンクRPG『ヴァンパイア・ザ・マスカレード』の日本語展開に関わった岩田恵・徳岡正肇の両氏をゲスト講師としてお招きし、同作を応用したキャラクターメイキングやライフパス、簡単なストーリーテリング体験ができるワークショップを展開しました。「赤との混色」は、こうした経緯で生まれた作品なのです。

ちなみに、『ヴァンパイア・ザ・マスカレード』は、アメリカ・ホワイトウルフ社が

開発した作品で、とりわけ一九九〇年代にはRPG界をほとんど席捲する勢いで、TVドラマにもなりました。現在も根強い人気を誇ります。アトリエサード社より日本語版が出たときには「SFマガジン」や「SFオンライン」で大きく紹介ができました。つい最近も、関連作品がPCゲームとして[アナウンズ](#)されたばかりです。

有名どころでは、ナンシー・コリンズの《ソーニャ・ブルー》シリーズ（ハヤカワ文庫FT）は『ヴァンパイア…ザ・マスカレード』のシェアードワールドでもあります。映画・原作ともに大ヒットした『インタビュウ・ウィズ・ヴァンパイア』や、《トワイライト》シリーズとも響き合う内容と言えるでしょう。

『ヴァンパイア…ザ・マスカレード』の大きな特徴として、貴族のようなヴェントル―氏族、暴れ者だが哲学者のような思慮も持つブルハー氏族、野生を忘れないギャンレル氏族、魔術を用いるトレメール氏族、芸術を愛するトレアドール氏族など、ドラキュラ伯爵のようなイメージに留まらない多彩なヴァンパイア像が提示されています。

そして「赤との混色」は、そのトレアドール氏族の設定が参考にされています。芸術に魅せられた大学生の語りで進められる作品なのですが、決して「わたし」という一人称を使わず、随所で「赤」のイメージが多重に混交されていく筆致も魅力的。

なお、ワークシヨップとして提出された小説の執筆者は、その多くが小説を書くこと

4 自体初めてで、日頃、本を読む習慣すらなかった受講生もいたほど。大学での講義そのものも、プロの作家を育てるよりも大学生に期待される学術的な知見の習得を重視していました。それゆえ課題として提出された小説も、創作的批評としての習熟度という観点から採点を行っております。この点が、他の「SF Prologue Wave」掲載作とは大きく異なります。あらかじめ、ご諒承ください。

「SF Prologue Wave」での公開にあたっては、片理誠編集長の助言を参考に、岡和田晃が補作を行いました。